張作霖爆殺事件の真相

儀我 壮一郎

目　　次

Ⅰ　田中義一政友会内閣の対中国「積極政策」
Ⅱ　張作霖爆殺事件と張学良の対応
Ⅲ　張作霖爆殺事件における謀略の真相
Ⅳ　孫文と張作霖・張学良の歴史的諸関係
Ⅴ　郭松齢事件と張作霖・張学良
Ⅵ　蔣介石指揮の「北伐」と張作霖・張学良
Ⅶ　田中義一内閣の総辞職
Ⅷ　歴史の小さな正誤表―参考文献紹介を兼ねて

Ⅰ　田中義一政友会内閣の対中国「積極政策」

1920年代後半の日本では，立憲民政党（1927年，憲政会と政友本党が合同して結成）と立憲政友会の二大政党が対立しながら政権を掌握する「政党政治」の時代が続いていた。しかし，1928（昭和３）年６月４日の張作霖爆殺事件を重大な画期として，「政党政治」は，しだいにきびしい条件にさらされ，天皇の統帥権をふりかざす軍部の独裁に席を譲るのである。

立憲政友会（1900年，伊藤博文の主導で結成）は，三井，安田，渋沢などの大財閥の支援を得，地主勢力を背景としていた。

立憲民政党は，1916年結成の憲政会（三菱の総帥岩崎彌太郎の娘と結婚した加藤高明が総裁，1924年６月第１次加藤高明内閣成立）が主軸であり，反政友会の諸勢力を結集し，三菱財閥の支持を得ていた。

「二大政党」に対抗する日本共産党，労働農民党，社会大衆党などもそれぞれ重要な役割を果たしていた。

ちなみに，政友会，民政党とも，1940（昭和15）年には，近衛文麿の新体制運動のなかで自発的に解党し，「政党政治」の主体が消滅，「大政翼賛会」に吸収されたのである。

さて，張作霖爆殺事件前後の政治情勢を見れば，1926年１月には，第２次加藤内閣の加藤高明首相の病死後，憲政会総裁の若槻礼次郎が首相となり，他の全閣僚留任で内閣が成立した。幣原喜重郎外相の協調外交は軍部・政友会から「軟弱外交」と非難されていた。1927年金融恐慌が勃発，台湾銀行救済問題で４月に総辞職。

若槻内閣の次は，田中義一（政友会総裁，予備役陸軍大将）内閣が成立。田中首相は外相を兼任したので，森恪（もり・つとむ，通称かく）外務政務次官が，対中国政策の強力な推進者となった。1927年６月27日から７月７日までの「東方会議」は森の進言にもとづくもので，森が全体を主導した。幣原「軟弱外交」に代る「積極外交」へと転換するのである。出席者名，７回の会議の要点は，畠山武『昭和史の怪物たち』（文春新書，2003年）の「森恪」の章などを参照していただきたい。

この東方会議が1928年６月の張作霖爆殺事件に直結したとする指摘もある。

「事実，この計画を指揮したのは関東軍高級参謀河本大作大佐で，実行したのは朝鮮軍の竜

山工兵隊の一部であった。河本は『東方会議の決定の線だから断じてやる』と，実施部隊の指揮官で鉄道爆破のスイッチを押した東宮鉄男大尉に語っている（平野零児『満州の陰謀者』，畠山武，前出，34ページ）。

田中内閣の高橋是清蔵相のモラトリアムで金融恐慌は一応鎮静した。中国に対しては，1927年５月から３次にわたる山東出兵を続け，そのなかで，1928年５月には，「北伐」中の蒋介石指揮の国民革命軍と日本軍が済南で武力衝突し，日本軍の集中砲火により，一般市民にも多数の死傷者が出た。悪名高い「済南事件」である。田中政権の中国革命への武力干渉に対しては，中国国内はもとより，日本国内においても反対運動が生まれ「戦争反対全国同盟」が結成された。田中政権は，第１回普通選挙を実施する一方で，1928年の三・一五事件，1929年の四・一六事件で，出兵に反対する共産党その他の革新勢力を弾圧し，治安維持法を改悪，特高制度を確立するなど，強権政治を行った。

その田中政権の時期の，張作霖爆殺事件が田中内閣総辞職をもたらすのである。

Ⅱ　張作霖爆殺事件と張学良の対応

2008年（平成20）年６月４日は，北京軍政府の支配者であった安国軍大元帥張作霖の没後80周年の祥月命日に当たる。

1928（昭和３）年の同じ日に，北京から奉天（瀋陽）に帰還しようとする張作霖坐乗の特別列車が，関東軍高級参謀河本大作大佐（陸士15期）を首謀者とする謀略によって，瀋陽駅付近の皇姑屯で爆破された。午前５時25分前後の爆破であり，その後の日中関係史と日本史を左右する画期的事件である。

車輌を直撃された張作霖は，瀕死の重傷，中国側の自動車で奉天城内の自宅に運ばれたが，第５夫人たち家族の看護も空しく，数時間後に憤死した。張学良の５番目の弟張学森（1920年生まれ）は，その状況を語った。「朝早い時間でした。２時間ぐらいして死にました。私の母（張学良とは異母）に子供の面倒をみるようにと言っていたように思います。翌日棺桶に入れ，蓋をしたんですが，一週間後に兄が家に戻ってまた蓋を開けたのを覚えています。兄が帰ってから死亡を発表しました。それまで日本の領事が調べにやってきましたが，私の母が寄せ付けなかったのです。われわれ子供にも出血多量の父の姿を極力見せないようにしていました」（『産経新聞』1992年５月28日付）。

ところで，同じ車輌の中で，張作霖と同行中の張作霖政権の軍事顧問儀我誠也少佐（陸士21期，「満州事変」の首謀者石原莞爾と同期。陸大30期では，敗戦時の陸軍大臣阿南惟幾と同期。筆者の父親）は，文字通り間一髪の差で軽傷，九死に一生を得た。爆破が数秒早いか遅いかで，張作霖と儀我は，共に生存あるいは共に死去，さらには立場が逆であったかもしれない。張学良と筆者は，父親の危機を共有していた。

当時，奉天の日本人小学校３年生だった筆者は，早朝の爆音に驚いて目を覚ましたが，事件の政治的背景など知るよしもなかった。

しかし，数え歳28歳の張学良（1901―2001）は，前線から，日本軍に覚られないよう炊事兵に変装して帰宅，周到な前後措置で，関東軍に侵略の口実を与えなかった。

張学良は，６月４日の事件当日は北京にいた。父の死去はまだ知らないままに，学良は前線に赴いた。「私〔張学良〕は北京から河北省の灤州に行き，軍隊を撤退させる任務を遂行しました。その仕事が完了したときに，部下がやっと父が死んだことを教えてくれたのです。……事件が関東軍の仕業だということは，誰でも知っていました。それは公然の秘密でした。……も

ちろん日本に対してたいへん不愉快で，不満でした。家仇国難すべて私の身に降りかかってきました。中国にはこのような古い諺があります。『父の仇(あだ)は，天の仇よりも憎し』と」（ＮＨＫ取材班・臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』角川書店，1991年，72―73ページ）。「私は父の字をそっくりまねて書くことができましたし，父の印鑑も残っていましたので，父の名で次々に命令を下しました。そして黒竜江や奉天の懸案事項が全て解決してから，父の死を発表したのです」（同上，73―74ページ）。

さらに，同年７月１日，黒竜江・吉林・奉天（遼寧）の東三省保安総司令に就任し，正式に張作霖の後継者となった張学良は，同年12月29日には，日本政府側の執拗な妨害を巧妙に排除して，張学良の宿願である国民政府との統合・全国統一を意味する「易幟（えきし）」を断行した。東三省にも，従来の五色旗にかわって，青天白日旗がひるがえることになった。早くも1928年に「満州事変」的軍事侵略を始めようとしていた河本大作・関東軍などの野望は挫折した。また，張作霖政権を傀儡（かいらい）政権的に利用しようとしていた田中義一政権にとっても，最悪の事態となったのである。

張作霖爆殺には「成功」したが，その結果は，張作霖打倒派と張作霖利用派の両者を含む日本の支配層にとって，「不利」な状況を生んだ。その打開策としての1931・昭和６年９月18日の「満州事変」は，日本の国際的孤立をもたらした。その後の日本は，侵略戦争の継続と拡大，そして敗戦への道を辿るのである。

Ⅲ　張作霖爆殺事件における謀略の真相

張作霖は，1875年，遼寧省海城県で，張孝文の三男として生まれた。作霖14歳の時に父の孝文は，賭博中遊び仲間に射殺されたという（古野直也『張家三代の興亡』芙蓉書房，1999年，31ページ）。清朝末期から緑林出身の軍人となり，日清・日露戦争に従軍した。1912年の中華民国成立後，奉天省，続いて東三省の実権を掌握した。地方軍閥が割拠する中で，日本政府・関東軍の支援を受けながら，軍閥相互の「合従連衡」を繰り返し，1924―25年には，孫文とも提携した。1927年には，南下していた北京で安国軍大元帥となり，北京政府を支配した。同年３月10日，張作霖は「建国大綱」の大要を発表したが，その中で「……大体において孫文の三民主義を是認し，国民党の主張せる国民会議招集によって時局を収拾し，国政の統一を図」るとした（水野明『東北軍閥政権の研究』図書刊行会，1994年，212ページ）。６月９日には，南北合作の方針を発表，三民主義に賛成しながら，「民徳主義」を加えて「四民主義」とする立場を示していた（同上，217ページ）。また，1928年５月の山東出兵・「済南事件」の惨劇にさいして，張作霖は，中国の主権を無視しないように，日本政府に警告している。同時に，北京が済南事件の悲劇の轍を踏まないために，芳沢謙吉駐華公使（後に犬養内閣の外相。緒方貞子第８代国連難民高等弁務官の祖父）の勧告の線で，1928年６月，東三省への帰還を決意した。６月４日未明，帰還の列車が爆破される。

列車爆破は，河本大作の独断的犯行ではなかった。村岡長太郎関東軍司令官をはじめ，支持者は少なくなかった。爆殺事件は，陸軍内部の長州閥（山縣有朋，寺内正毅，田中義一その他）対反長州派の対立などの派閥間の暗闘と軍規違反の下克上の流れを加速化させた（田中隆吉『日本軍閥暗闘史』中公文庫，1988年，大江志乃夫『張作霖爆殺』中公新書，1989年，など参照）。村岡長太郎関東軍司令官は，張作霖暗殺を計画中であったが，河本大作主張の「諸外

国の批判を避けやすい」という理由などによって，満州での殺害案に賛同していたとされている。

列車爆破の瞬間について，生き残った儀我誠也のなまなましい談話が記録されている。

「大元帥顧問として，張と同車で奉天へ来た陸軍少佐，儀我誠也の談によれば，張は重傷を負ふたのみで，死なゝかったのである。即ち

『昭和三年六月四日午前五時半頃，もう瀋陽駅も近いので，張作霖は起きてゐた。食堂車のスモーキングで，張は，山海關から乗込んだ黒龍江督辨の呉俊陞と二人で話してゐた。自分〔儀我少佐〕も二人の間に据わって話し込んでゐると，呉と張とが「寒いから外套でも着なさい」といひながら，私に外套を着せやうとした。丁度その時である，列車がクロスガードの下を潜ったかと思ふ瞬間，我々の乗って居た食堂車の右前方に一大爆音が起こると共に，車輌の天井が落下して黒煙に包まれてしまったから，張も呉も見えなくなって，自分は膝部に打撲傷を受け，腕と顔面に微傷を負うて居た』といふのである。

儀我少佐は助かったが，呉俊陞は先づ死し，張も次いで死んだらしい。但し即死ではなかった。張の第六夫人と下婢とは即死した。……

兎に角，支那側は此の暗殺を日本人の計画と確信したらしく，支那兵は直に小銃や機関銃を乱射し，奉天城内の人気は殺気立って，日本人は城外に立ちのくより他に途がなかった。……

それ位であったから，張の病室には日本人を絶対に寄せつけなかった」（高田義一郎『聖代暗殺事件』萬里閣書房，昭和５〔1930〕年10月20日発行，338～339ページ）。

爆殺事件の約３時間後に，儀我少佐は次のように発言したと報道されている。

事件の翌日付の『大阪朝日新聞』（昭和３年６月５日・夕刊）は，１面トップに「南軍の便衣隊張作霖氏の列車を爆破」の大見出しで報道した。「奉天特電四日発」のなかで，儀我少佐は，「四日午前八時二十分土肥原〔賢二〕公邸において列車爆破事件につき語る」として「自分は微傷を受けたのみであった，張氏は鼻柱を負傷し一時人事不省に陥ったので直ちに護衛兵がかかへ下して手当を加へ，蘇生せしめて折柄警備中の日本軍屯所に連れ込まんとしてゐたところへ，支那側の憲兵司令斉恩銘氏の自動車が折よく来かゝったので，これに乗せて城内の官邸に送りとゞけた。当時護衛兵は張氏をかばふようにして一時盲滅法に方向を定めず発砲したが，警備中のわが兵は応戦しなかった」との談話を掲載した。さらに「なお少佐は別項の通り今回の事件をもって南軍〔蒋介石指揮下の国民革命軍〕便衣隊の仕業であることを理由をあげて説明した」と報じている。

別項の記事では，これよりさき３日午後11時頃，現場附近を「態度怪しき支那人七八名が通行しているので折柄警備中のわが独立守備隊東宮大尉の部下が誰何し追跡しうち二名を刺殺して調べたところ，懐中には一通の国民革命軍の印ある手紙を所持してゐた。そのなかには張作霖氏の奉天帰着列車の時間などが明記されてあったところから考へて南軍の便衣隊の仕業なること判明した」とある。しかし，前日３日の午後11時頃、発見され現場から追い払われ，そのうち２名が刺殺された「南軍の便衣隊」が，どのようにして翌４日午前５時30分頃に，列車の爆破に成功することができるのか，少なくとも日本側の警戒はより厳重になった筈であるから，「便衣隊犯人説」が全くのこじつけであることは，歴然としている。

ちなみに，その後の６月11日の陸軍省発表では，「当日午前三時頃，怪しき支那人三名，潜（ひそ）かに満鉄線鉄道堤上を上らんとしつゝあるを発

見せる我が監視兵は，……」とし，刺殺した２名の屍体から爆弾２個および３通の書信を発見したとする。６月５日付の報道と，時刻も人数も爆弾所持の有無も，すべて微妙に喰い違っている。事件後比較的早く公刊された高田義一郎『聖代暗殺事件』（萬里閣書房，昭和５〔1930〕年）によれば，当時，中国側は，「此の暗殺が電気装置による爆破である以上，己にその爆破装置完了の暁に，如何なる愚人と雖も，役にも立たぬ手榴弾をぶら下げ，剌（あまつき）へ，証拠物件となるべき重要書類を手にしながら，その附近を徘徊するであらうか，馬鹿も休み休みいふがいゝ。……犯人は明に日本人であると力説して止まない。」「……以上の他にも労農ロシアの手か，楊宇霆が首謀者か，或は張旗下の不平党か等の諸説もあるが，要するに犯人はわからないのである。」（340―341ページ）。

加害者である河本大作・関東軍の「免罪」のために謀略は，重層的であった。

①　アヘン中毒の中国人２名を，爆発現場近くで殺害し，偽の文書などを持たせて，南軍（蒋介石指揮の北伐軍）による犯行と偽装したが，短期間のうちに馬脚があらわれた。

②　張作霖と同じ車輌に最後まで同乗していた唯一の現役の儀我誠也少佐に対して，支那公使館付武官であった建川美次少将（山中峯太郎の冒険小説『敵中横断三百里』の主人公として著名）は，「軍服を着用するように」と指示していた（秦郁彦『昭和史の軍人たち』文芸春秋，1982年，189ページ）。このことは，現役の日本人将校が同乗する列車を，関東軍が爆破するはずはないと思わせるための「アリバイ作り」の一環であった。張作霖の軍事顧問団は，田中首相・参謀本部と直結し，現場感覚重視の関東軍との間には，認識のズレ・不一致があった。儀我少佐は，河本大佐の計画を全く知らされていなかったので爆破には憤っていた（松本清張「満州某重大事件」『昭和史発掘３』文春文庫，1987年，林育梧『黄土の碑』光風社書店，1973年参照）。町野武馬顧問が，北京から同乗しながら途中下車した経緯が注目される。

③　事件当日の６月４日発行の６月５日付の『大阪朝日新聞』夕刊に，儀我少佐が，「午前８時20分，土肥原公館」で「南軍便衣隊の仕業であることを理由をあげて説明した」と記されている。儀我少佐は，爆破直後に関東軍の犯行と察知していたのに，このような僞の情報を発信した。さらに，同じ紙面には，「支那人ら興奮して邦人を追ひまはす　通行中のわが学生重傷」という記事が掲載され，日本側が「被害者」であるかのような論調である。

④　爆破犯人について，張政権内部の楊宇霆が疑わしいとする風評も流布されていた。

⑤　最近では，ソ連が爆殺事件に関与していたとする「新情報」が伝えられているが，このこともまた，関東軍「免罪」，靖国史観補強のための謀略であろうか。

張作霖爆殺事件は，鉄道を舞台とする，「国際的一大謀略事件」である。

1949（昭和24）年に，鉄道をめぐる３大事件が続発した。その真相解明と，張作霖爆殺事件との比較検討は，残された課題である。

①　1949年７月５日，初代国鉄総裁下山定則が，常磐線北千住―綾瀬間で，轢死体として発見され，政府は当初「他殺」と断定し，日本共産党や労働組合の犯行と想像させる報道も多かった。国鉄労働組合が，９万人の人員整理案に反対する闘争中に起こった事件である。その後，自殺・他殺不明のまま時効。

②　1949年７月15日，中央本線三鷹電車区内で無人電車が暴走し，20人が死傷。国鉄労働組合側の陰謀と宣伝され，死刑判決の被告竹内景助氏は，再上告中，1967年病死。

③　1949年８月17日，東北本線の松川―金谷

川間で列車が転覆，乗務員３名が死亡した。国鉄と東芝の労働組合員20名が起訴され，１・２審とも有罪判決。しかし，1963年，全員無罪が確定した。時効となったが，真犯人不明のままである。

以上の下山・三鷹・松川の３大事件については，米軍犯人説を含む松本清張『日本の黒い霧』（文芸春秋，文春文庫にも再録）が必読である。

張作霖爆殺事件の河本大作型の侵略的意図を引きついだ石原莞爾，板垣征四郎を首謀者とする1931（昭和６）年の「満州事変」の発端も，鉄道を利用した国際的謀略事件であり，ここでも加害者が「被害者」を装う。

1931（昭和６）年９月18日，北京に滞在していた張学良の留守を狙って，日本側が柳条湖の満鉄線路をみずからの手で爆破しながら，中国側が爆破したと称して開戦した欺瞞的・謀略的な手法が，いまあらためて重視される。

「一九三一〔昭和六〕年九月一八日夜，奉天の北部八キロの柳条湖付近で満鉄線が爆破された（上下線あわせて一メートルたらずで被害はほとんどなかった）。実行していたのは関東軍の中尉ら三人だったという。関東軍はこれを『暴戻なる支那軍隊』によるものだとして一斉に軍事行動を開始し，翌日中に奉天，長春，営口を占領，二十一日には吉林まで進出した（満州事変，中国では九・一八事変と呼ぶ）。／当時北平〔北京〕で病気の療養中だった張学良は，電報で全軍に不抵抗・撤退を命じ，戦火の拡大を避けようとした。蔣介石は対共産軍作戦に追われていて軍隊を北上させる余裕はなかった。中国の提訴を受けた国際連盟も有効な措置をすることができなかった。ソ連もまた第一次五ヶ年計画に忙しく，満州事変に不干渉の態度をとった。／これらの条件に助けられて，関東軍の軍事行動は拡大の一途をたどり，……わずか五カ月で満州の全域を軍事占領下においたのである」（小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』岩波新書，1986年，139ページ）。

Ⅳ　孫文と張作霖・張学良の歴史的諸関係

孫文（字は逸仙または中山，1866―1925）は，香港・澳門（マカオ）に近い広東省香山県（現・中山県）に生まれ，太平天国軍の参加者からの話によって反逆精神を養った。ハワイで成功した兄に呼び寄せられ米国式の教育を受け，18歳で帰国後，医学を学んで開業。1894年には，ハワイで「反清朝」の「興中会」を結成，悪戦苦闘を経て，1905年、日本各界の支援もあり，東京で，他の革命諸団体をも結集し，「三民主義」（民族主義・民権主義・民生主義）を綱領とする「中国（革命）同盟会」を結成し，その総理となった。

1911年（宣統３年，辛亥の年）10月10日の武昌軍隊の蜂起を契機とする辛亥革命が全国に拡大するなかで，翌1912年１月１日，孫文を臨時大統領とする中華民国臨時政府が，南京で成立した。清朝は，袁世凱を起用して対応しようとした。

孫文は，臨時大統領就任の翌月14日，英国・米国の支持を得，「新軍」の軍事力を掌握していた袁世凱に，ラストエンペラー溥儀（宣統帝）の退位などを条件として，臨時大統領の職を譲った。退位は実現，清朝は滅亡した。

袁世凱が，皇帝を目指して独裁色を強めたので，1913年，九江，南京などで孫文・国民党勢力は武装蜂起（第２革命）したが失敗し，孫文は日本に亡命，袁が正式の大統領となった。

袁は，第１次世界大戦中の1915年に，日本の大隈重信政権の中国にとっては屈辱的な「21ヵ条要求」を受諾，同年12月に「中華帝国皇帝」となった。しかし，全国で「抗日」と「帝制反

対」の運動（第３革命）が高揚した。袁は窮地に陥り，帝制取り消しなどで妥協を図ったが，1916年６月，病死した。

袁世凱の死後，北洋軍閥は，①段祺瑞中心の安徴派（日本が支援）と②馮国璋・曹錕・呉佩孚らの直隷派（英米が支援）とに分裂しながら「中央政府」としての北京政権を掌握し続けた。さらに東三省・満州の張作霖（日本が支援），山西の閻錫山，雲南の唐継堯，広西の陸栄廷，湖南の譚延闓，広州の陳炯明などの軍閥が割拠し，北京の「中央政府」と対立していた。軍閥割拠は，1928年の国民政府樹立まで続く。

袁の死後，黎元洪が大統領に就任したが，実権は国務総理の段祺瑞が掌握。張勲による復辟事件（清朝復活宣言）などの派乱はあったが段祺瑞が北京政府を支配，これに反発する西南軍閥（陸栄延，唐継堯等）と結んで，孫文は1917年７月広東に入り，「護法」のための広東軍政府を組織した。護法戦争が１年余り続く。

内戦の多発と各軍閥の合従連衛・離合集散を経て，1924年，張学良・郭松齢の善戦健闘が見られた第２次奉直戦争（1924年）によって直隷派の呉佩孚は北京から敗退した。これは，孫文・張作霖・段祺瑞の「三角同盟」の成果である。この間，張学良は，孫文との提携にも貢献していた。1924年11月，孫文は，馮玉祥・張作霖・段祺瑞の北上の要請にこたえて，広東を出発，途中神戸に立ち寄って「大アジア主義」の講演を行った。「そのなかで彼は，日本は功利と強権をほしいままにする『西洋覇道の番犬』となるのか，それとも公理に立った『東洋王道の牙城」となるのか，と問いかけ，中国だけでなく全アジア被圧迫民族の解放に力をかすことこそがアジアで最初に独立と富強を達成した日本の進路であると訴えた」（小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』岩波新書，1986年，107ページ）。孫文は，12月４日天津に到着，張作霖と会談した。12月31日、北京に入ったが，肝臓病が悪化，翌1925年３月12日，「革命未だ成功せず，同志なお努力すべし」とする遺言を残して死去した。ちなみに，遺書を筆記したのは，汪精衛（兆銘）である。

顧みれば，1940年開始の英国とのアヘン戦争の敗戦以来、中国は「半植民地」の状況におかれてきた。また洪秀全が指導した「反清朝」の太平天国革命（1850―1864）も，内紛と英仏両国の軍事的干渉によって挫折した。孫文は，「反清朝」の太平天国の経験からも多くを学んでいたのである。

1917年の隣国ロシアにおける10月革命は，中国の前途に重大な影響を及ぼした。また1919年には，第１次世界大戦（1914―1918）処理のヴェルサイ講和会議において，日本の「21ヵ条の要求」の多くが認められ，中国の主張が認められなかったことを契機として，５月４日，北京で「五・四運動」が火蓋を切り，全国的な民衆運動に発展，中国史の新段階が生まれた。1921年７月には，上海で中国共産党が結成され，労働運動も高揚しはじめた。

孫文は，人民の力量を理解し，1924年１月の中国国民党第１回全国大会で，三民主義を「新三民主義」に高め，「連ソ・容共・労農援助」の三大政策にもとづいて，第１次国共合作を実現した。民族主義（反帝国主義の民族解放と国内諸民族の平等），民権主義（反封建軍閥と民衆の自由と権利），民生主義（地権の平均と資本の節制）の「新三民主義」は，中国の新しい進路を切り拓くものであった（池田誠・儀我壮一郎・松野昭二『中国革命史』法律文化社，1965年，第１章・第２章参照）。

張作霖が，「孫中山と連繋したことは国民党の主義たる反帝国主義の国権回収の思想を東三省に導入する結果をもたらし，抗日機運は俄かにたかめられるに至った（対支功労者伝記編纂

会『対支回顧録』上巻，1936年，548ページ―水野明『東北軍閥政権の研究』図書刊行会，1994・平成６年，162ページより再引)。

張作霖の日本政府に対する対抗策は，第１に，満鉄に対抗する鉄道併行線（瀋海鉄道，打通線，吉海鉄道）の敷設，第２に土地商祖権問題・日本人居住営業問題・朝鮮人雑居問題等であり，日本政府側からは，既得権益の侵害として「抗議」を繰返す状況であった（水野明，前出，162―168ページ参照)。

また，すでに郭松齢から国民党の政策について学んでいた張学良の孫文に対する敬愛の念は1925年を回想する1990年の次の発言によっても明らかである。

「私が孫文先生に会ったのは，先生が重病でベッドに臥している時でした。先生は私をベッド際に座らせ，こう話しました。『あなた方の東北は，紅〔連ソ・容共の孫文の言葉であるから「黄＝日本」か？―儀我〕白ふたつの帝国主義の中間に位置しています。ですからあなたがた東北の若者の責任はたいへん重大です』。私は先生の言葉にたいへん感動しました。私は国民政府に大きな期待感を抱いていました。なぜなら私は，中国が統一されることを望んでいたからです」（ＮＨＫ取材班・臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』角川書店，1991年，41―42ページ)。孫文と張学良の間には，孫・段・張の「三角同盟」をまとめるための書簡の往復があり，孫文が張学良に贈った「天下為公」の横軸（郭君・訾喜升・葛風傑主編『張学良将軍画伝』遼寧教育出版社，1993年，58ページにその写真収載）もある。両者の信頼関係は深かった。1928年６月の張作霖爆殺事件後約６ヵ月の同年12月29日の「易幟」，さらには1936年12月12日の「西安事変」にいたる張学良の政治的軌跡には，このような思想的・政治的土壌があったのである。

Ⅴ　郭松齢事件と張作霖・張学良

1925年11月の郭松齢の張作霖に対する反乱事件は，張作霖支持派にとっても，反対派にとっても，重要な意味をもつものであった。まず，張学良と郭松齢との関係を見よう。

張学良は，1901年６月４日，張作霖の長男として誕生。この誕生日は，父作霖がはじめての戦いに勝利した日であり，27年後には，関東軍によって作霖が爆殺された日に当たる。学良は，父の死去の日に自らの誕生を祝うことはできないので，その後，誕生日を６月３日に改めている（張学良の伝記については，西村成雄『張学良』岩波書店，1996年，参照）

ちなみに，張作霖には６人の妻がいて，学良の弟は７人，妹は６人。同母弟は学銘である。

「無学」であった張作霖は，学良に英才教育を施した。学良自身は人を救う医者を志したが，父は反対し，政治・軍事の後継者として育成した。学良は英語教育を受け，ＹＭＣＡにも出入りしていたが，1919年には，軍幹部養成の「東三省講武学堂」に第１期生として入学，すぐれた戦術教官である郭松齢（1988―1925）から多くの影響を受けた。郭は，辛亥革命当時は四川省駐屯の「新軍」の軍人で，孫文創設の中国同盟会に参加し，反清朝の活動に従事，強固な民族主義思想の持ち主であった。張学良は，郭を通じて孫文に親近感を抱きはじめた。

1920年、20歳で講武学堂を抜群の成績で卒業した学良は，旅団長に任命され，郭松齢を部下の参謀長とした。1921年訪日した学良は，奇しくも同年齢で，よく似ていた昭和天皇（当時皇太子）と２度も間違えられたりしたが，参観のさいの日本軍の演習や兵器・軍艦などの誇示には反発し，この面でも，抗日に傾斜した。第１次（1922）と第２次（1924）の奉天派対直隷派

の「奉直戦争」における張学良・郭松齢の奮闘と第２次のさいの勝利によって，奉天軍内部での学良の地位は確立した。

しかし，1925年11月，郭松齢が，馮玉璋と密約を結び，張作霖に対して反旗を翻えしたので，張学良は窮地に陥った。日本では，平重盛が，1177年の鹿ヶ谷事件にさいして，父清盛と後白河法皇の対立のはざまにあって，「忠ならんとすれば孝ならず，孝ならんと欲すれば忠ならず」と嘆いたが，学良の立場は，より深刻であった。

張学良は，郭松齢との面会を試みたが拒絶され，守田福松医師・儀我誠也軍事顧問などを通じての連絡，書簡の往復など，努力を重ねたが，郭松齢の翻意を得られなかった。

郭松齢軍は，学良の配慮にもかかわらず，奉天への快進撃を続け、張作霖は，一時，下野を覚悟したほどであった。

しかし，日本側は張作霖支持を決定し，関東軍が満鉄から30キロメートル以内での戦闘を禁止したことによって形勢は逆転，12月23日に郭松齢夫妻は新民県で捕らえられ，楊宇霆の命令によってただちに銃殺され，遺体は奉天で曝しものにされた。張学良は，郭松齢の助命・海外出国の意向であったが，かねてから対立的立場にあった楊宇霆の早急な郭松齢処刑に対して，悲憤の念を抑えきれなかった。

この郭松齢反乱事件は，日本の張作霖支持派（田中義一首相など）にとっては，張作霖懐柔・操縦の条件と見なされ，逆に，張作霖打倒派にとっては，張作霖を「忘恩の徒」として批判するさいの論拠とされたのである。また，張作霖政権内部においても，「保境安民」論を提唱し，軍事費の削減を主張していた実力者王永江の辞任があり，張政権全体に弱化の兆が見え始めた（渋谷由里『馬賊で見る『満州』―張作霖の歩んだ道』講談社，2004年，149―156ページ参照）。さらに，「土派」に属する張学良の立場が弱化し，「洋派」に属する楊宇霆が権勢を誇示する一因となったことも否定できない。

Ⅵ　蒋介石指揮の「北伐」と張作霖・張学良

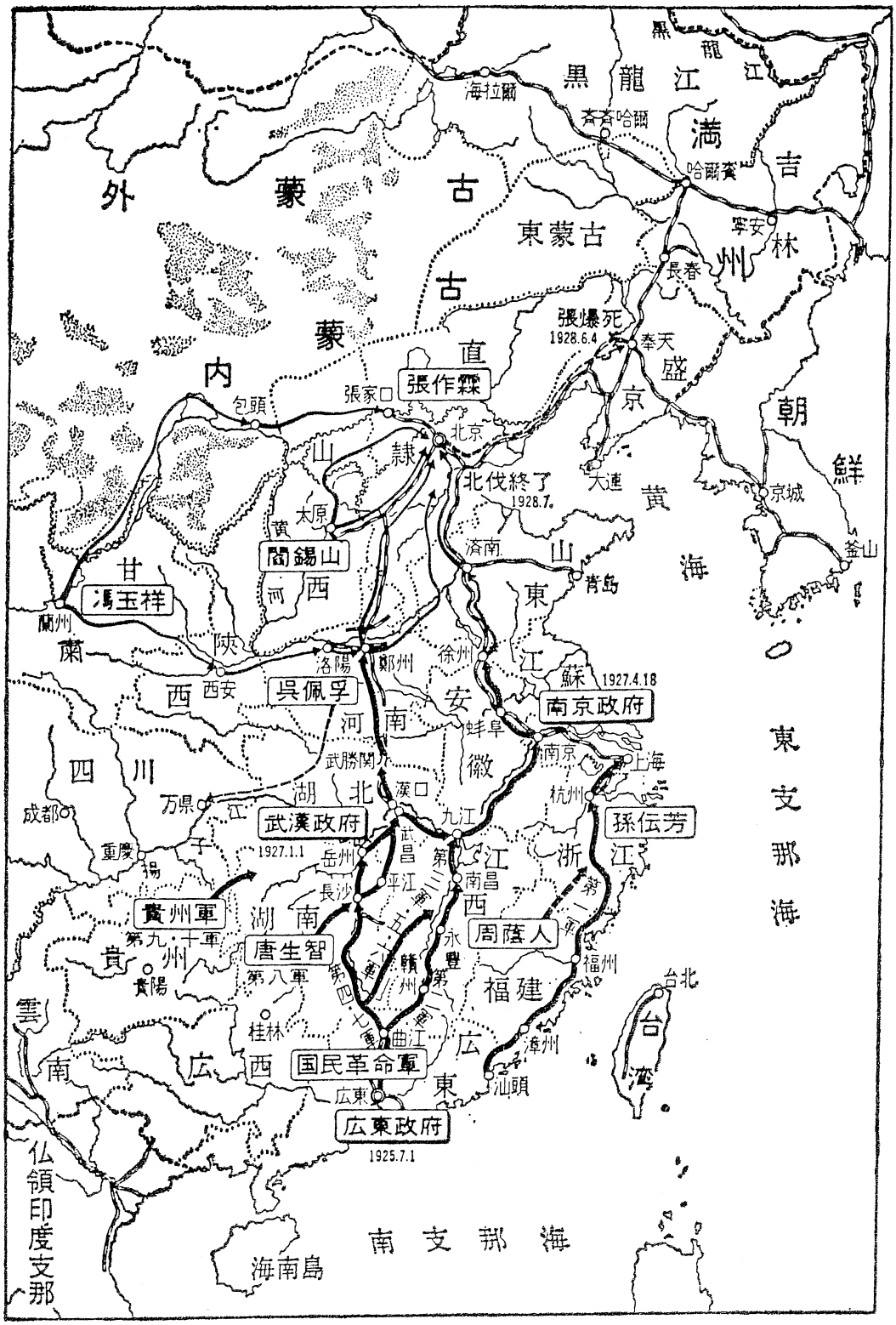
孫文は，袁世凱の死後，北京の軍閥政府打倒の「北伐」を念願し続けた。張作霖は，前述の「三角同盟」などのように，孫文・国民党との提携による中国統一を目指したが，1925年３月の孫文の死で実現不可能となった。

孫文の「北伐」・全国統一の遺志は，蒋介石（1887―1975年）が継承する形となった。蒋介石は，浙江省奉化県の豊かな商家の生まれであるが，９歳までに祖父と父が死去し，母子家庭の辛酸を経験した。

蒋介石は，日露戦争直後の1906年，一時的に日本に渡り，孫文の有力な同志陳其美（その甥が陳果夫・陳立夫兄弟）と知り合った。一旦帰国し，保定軍官学校を経て，再び訪日，振武学堂（日本陸軍の清国留学生教育機関）に入学。在日中に中国同盟会に加入した。第13師団の（新潟県）高田連隊野戦砲兵第19連隊の隊付将校となったが，1911年10月辛亥革命開始を知り，長岡外史師団長の慰留にもかかわらず，陳其美の要請に応じて，張群，陳星枢らとともに除隊，陳其美の指揮下で革命派軍人として活躍しはじめた。しだいに孫文の信任を得て，1923年８月にはソ連を訪れた。1924年５月には新設の黄埔軍官学校校長となり，孫文の死後，1926年７月，国民革命軍総司令に就任。第２次「北伐」戦争を開始した（儀我「中国と日本の100年」常葉学園浜松大学『経済情報学部論集』８巻特別号，1996年３月，391ページ以下参照）。

蒋介石の当初の「北伐」戦略は，水野明氏によれば，「打倒具佩孚」（直隷派）「妥協孫伝芳」，

図　北伐戦争と軍閥割拠の状況



（出所）　松本清張「満州某重大事件」『昭和史発掘３』（文春文庫　1978年）20ページ

「不理張作霖」（奉天派）」（張作霖を相手にしない）であったが，1927年８月には蔣作賓を奉天に派遣して，張作霖・楊宇霆と接触し，「密通張作霖」に転じた（水野明『東北軍閥政権の研究』前出，203ページ以下）。孫文と張作霖・張学良との密接な諸関係が想起される。同時に，「連ソ・容共・労農援助」の孫文との提携の場合には見られなかった「反共」の側面での蔣介石と張作霖の共通性が注目される。

蔣介石指揮下の「北伐」は，国共合作という条件のもとで，労働者・農民の支援を得ながら快進撃を続けたが，1927年４月12日，蔣介石は，上海で，突如「反共クーデター」を強行，「上海の街は血の海と化した」。「この上海の惨劇はアンドレ・マルロウの『人間の条件』になまなましく描かれている。つづいて４月15日には広州でも同じような大虐殺が行われ，以後蔣介石の支配地域ではどこでも白色テロが荒れ狂った。時を同じくして４月６日，北京でも奉天軍閥張作霖の軍隊がソビエト大使館を襲い，機密文書を押収するとともに，潜伏していた李大釗ら共産党員を逮捕，処刑した」（小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』前出，117―118ページ）。

このように，北の張作霖，南の蔣介石は，ともに，「反共」の立場に立った。国民党の武漢政府（汪兆銘ほか）は，「反共クーデター」に憤って，蔣介石を国民党から除名した。

蔣介石は，ただちに，４月18日，国民政府（南京政府）を設立して対抗。武漢政府が「反共」と南京政府との統合に傾くなかで，蔣介石は1927年８月下野。９月に訪日し，11月５日には，田中義一首相と私邸で会談した。

蔣介石と田中義一首相との会談の時期に注目しよう。田中政権の蔣介石との会談直前の「東方会議」は，満業地域を，日本が「20億の国費と10万同胞の血」をもって獲得した生命線であるとし，同年５月の第１次山東出兵を正当化する議論を含むものであった。出兵は，蔣介石指揮の国民革命軍の「北伐」の阻止と，張作霖政権の擁護を目的とする，田中首相の中国本土との「満蒙分離政策」の具体化である。

蔣介石の側は，同年４月12日の「反共クーデター」と自らの「下野宣言」にもとづいて，田中政権と「共産主義反対」の方向で一致し得る側面を重視していたとも考えられる。第３回東方会議で，芳沢謙吉駐華公使は，「南北決戦すれば勝味は南方七分。中国の資源を利用するために中国の国民運動には同情的態度が必要だ」と発言し，第６回会議では，南参謀次長の，「中国赤化についてソ連に対し警告すべし」との発言があったのである（畠山武『昭和史の怪物たち』前出，28―29ページ）。

田中義一首相は，「国民党内の反共穏健派を率いる蔣介石によって，いずれは満蒙を除く中国が統一されるのは不可避であろうと観測していた。最も望ましいのは，張作霖と蔣介石との妥協により，張作霖が満蒙を支配し，蔣介石がそれ以外の中国を統一することであった。そのため，田中は張作霖に満蒙帰還を働きかけようとする。日露戦争で張作霖の命を助けてやったと考える田中は，張説得に自信があった。『天下取り』の野心を放棄して張が満蒙支配に専念し，それを日本は援助してやれば，日本の在満権益は安泰であるはずであった。田中は，来日中の蔣介石の密使と会見し，現役を退いて帰国した坂西〔利八郎中将・1927年予備役編入，後に貴族院議員〕とも協議させた。張作霖の密使も来日し，坂西の斡旋により蔣介石の密使と接触している（戸部良一『日本陸軍と中国』講談社，1999年，81ページ）。このような状況のものとで，蔣介石と田中首相との会談が行われたのである。

ただし，以上と全く異なる次のような見解もある。

田中義一首相は，1927（昭和２）年９月、一時下野して来日中であった蔣介石に対して，北伐戦争の再開を促し，「軍閥の横行によって麻の如く乱れている中国を統一できるものは貴君だけだ。貴君が再起するなら，日本はできでるだけ援助を惜しまぬ」と説いたという。蔣介石は，激しい国内戦となった時，「私だけを援助して下さるのか。つまり，張作霖を見殺しにする決意が日本政府および田中首相におありですか」と鋭くつめ寄ったという。この後，1928（昭和３）年１月，国民革命軍総司令に復職し，北伐戦争を再開する蔣介石には，日本陸軍現役の佐々木到一中佐がついていた。重視すべきところである。

田中首相は，蔣介石と張作霖との国内戦争によって双方の勢力を弱化させ，同時に双方に対する日本政府の影響力・支配力を強化するという「高等戦術」を意図していたとも見られる。根津司郎『昭和天皇は知らなかった』（早稲田出版，1991年）によれば，河本大作は，「田中のとった二兎を追う愚は，遠からず，日本へのツケとなって回って来ることを察知した」と述懐している。

ちなみに，張作霖の死後，張学良と楊宇霆が，実質上の後継者争いを続けていた時にも，日本政府・陸軍は，両者いずれが実権を握っても，日本の支配力を保持し得る態勢を整えようとしていた（儀我「1929年１月における張学良少帥」常葉学園浜松大学『経営情報学部論集』11巻１号，1996年６月，参照）。

田中首相は，蔣介石と張作霖の両者に影響を及ぼす政治的地位にあり，蔣介石と張作霖との間には，日本政府の意に反する「蔣・張密約」があるとすれば，以上の３者の関係を読み解くさいにも，部分的・一面的な理解に陥ってはならないのである。

1927年９月，南京政府と，共産派を排除した武漢政府とが合同した。翌年１月，蔣介石が国民革命軍総司令に復職し，「北伐」が再開された。この時，現役の陸軍軍人佐々木到一中佐（後に中将）が，革命軍総司令部に従軍を申し入れ，許可された。総司令部は，日本側との衝突が起こりそうになった場合の連絡役を彼に期待したようである。北伐軍の首脳には日本の陸士・陸大出身者が少なくなかった。佐々木がもっとも警戒したのは，革命軍が進出してゆく先々で，国民党のポスターが「打倒日本帝国主義」と，日本だけを反帝国主義のターゲットとしていることであった。その原因は，主として前年の山東出兵にあった（戸部良一『日本陸軍と中国』前出，142―143ページによる）。

さらに，第２次山東出兵のさいの済南事件（1928年５月）によって，蔣介石と佐々木到一との結び付きは断ち切られ，佐々木の国民党観も大きく転換する（同上，143―152ページ参照）。

「北伐」は四路に分れ北京を目指して進撃した。「四路とは即ち，蔣介石の軍，閻錫山の軍，馮玉祥の軍，李宗仁の軍の四つであった……張作霖も非常に危機に陥ったので，私〔芳沢謙吉〕は東京と連絡の上，北京を修羅の巷にしたくないという見地から，一夕大元帥府に張を訪い，平和裡に国民軍に明け渡すべきだと深更まで勧誘したが，張はあくまで踏み止どまって，国民軍と一戦すると主張して，私の勧告を容れなかった。しかし形勢は日々に悪化したので，……六月一日，……各国公使を茶会に招き，北京退去の声明と離別の挨拶を述べたが，あくまで負けず嫌いの張であるから，大元帥府は北京から奉天に移転するのだと説明した。そして六月三日午前二時十五分，潘復初め政府の要人等を率いて北京を引き揚げたが，これは永遠の離別であった」（芳沢謙吉『外交六十年』中公文庫，1990年，85―86ページ）。張作霖爆殺の後，

蒋介石は閻錫山の第三軍に北京制圧を命じ，1928年６月８日，北京城内にも青天白日旗が翻えり，「北伐」は成功した。

Ⅶ　田中義一内閣の総辞職

田中義一首相は，「東方会議」を前提として，東三省，満蒙を中国本土から切り離し，実質上，日本の支配下におく方針であった。そのために，山東出兵の強硬策を繰返したが，結果的には，中国の抗日機運に拍車をかけることとなった。蒋介石の「北伐」は成功，対照的に，田中内閣は総辞職に追いこまれる。1927年11月に会見した蒋介石と田中義一は，張作霖爆殺事件によって，明暗全く相反する道を辿ったのである。

田中首相が，張作霖政権を利用可能と考えていた理由は，①日露戦争のさいの（スパイ容疑の）張作霖の助命，②郭松齢の張作霖に対する反乱のさいの関東軍による張作霖擁護，③国民革命軍の「北伐」阻害の山東出兵などであった。しかし，関東軍，陸軍内部，外務省などには，張作霖を「忘恩の徒」とし，打倒せよとする機運が強まっていた（加藤陽子『満州事変から日中戦争へ』岩波新書，2007年，88―92ページ）。張作霖打倒派の論拠は，①全中国的な抗日運動の満州への派及の放置，②対米接近の動き，③満鉄の併行線建設計画（一部実現），④在満日本人・朝鮮人の既得権益の侵害などであった。

河本大作首謀の張作霖爆殺は，まず「関東軍の暴走」さらに「軍部の暴走」の火蓋を切ったものである。事件後、双薬会会員の河本大作は，関東軍・陸軍内部で「英雄視」されていた（保坂正康『東条英機と天皇の時代』ちくま文庫，2005年，90ページ）。

張作霖政権の温存と利用を考えていた田中首相は，①予想外の張作霖爆殺による失意，②昭和天皇への「奏上」内容の矛盾に対する天皇のきびしい叱責，③野党民政党の攻撃など国内外からの批判の高まり，その他によって，窮地におちいり，1929（昭和４）年７月２日，ついに「引責辞職」に追い込まれた。さらに，総辞職後，時を経ずして，９月29日に急死という道を辿った。

後任の首相は，加藤高明内閣の蔵相，若槻礼次郎内閣の蔵相・内相を経て，民政党総裁となった浜口雄幸（1870―1931）である。対中国外交では，米国との協調を重視したが，軍部・右翼から「軟弱外交」と非難された。ロンドン軍縮条約に調印し，統帥権干犯問題が生まれ，1930年東京駅頭で，愛国社員佐郷屋留雄に狙撃され，翌年死亡した。張作霖爆殺という暴力的手段の延長とも見られる事件である。さらに，1932年の「五・一五事件」（政友会犬養毅首相他暗殺），1936年の「二・二六事件」（岡田啓介首相を襲撃，閣僚などを殺害）などによる軍部独裁と戦争拡大への道もまた，張作霖爆殺を出発点とするのである。張作霖爆殺が，1931年９月18日の「満州事変」、1937年７月７日の蘆溝橋事件・日中戦争拡大へと連動していることは，論をまたない。

ところで，河本大作大佐は，1929年４月１日付で停職処分，1930年予備役に編入，関東軍司令官村岡長太郎中将は７月１日予備役編入という軽微な「処分」で事件は幕引きされた。その後，河本は，満鉄理事，満州石炭理事長，山西省の山西産業社長などを歴任する形で「優遇」されていた。敗戦後，逮捕され，1953年８月，太原の戦犯管理所内で病死した。顧みれば，1923年の関東大震災のさいの甘粕正彦憲兵大尉による大杉栄他の殺害が，軽微な処罰のみに終り，その後，甘粕は官費によるフランス留学，「満州国」内で要職につくなど「優遇」されたが，敗戦直後，自殺した経緯と河本の場合の比較も必要であろう（角田房子『甘粕大尉・増補改訂

版』ちくま文庫，2005年，参照)。支配層にとって有用ないし重要とされる暗殺犯は，「優遇」される例が多い。逆に，河本大作の厳罰を要求した西園寺公望，牧野伸顕その他は，その後の右翼テロの対象とされたのである。

日本と東アジアにおける戦争（内戦を含む）と暗殺・テロリズムの歴史については，別稿（儀我「東アジアにおける戦争とテロリズム」『中央大学経済研究所年報』34号，2004年３月）を参照していただきたい。

Ⅷ　歴史の小さな正誤表
―参考文献紹介を兼ねて

歴史は，過去と現在との対話であるという。また，「同時代史」というとらえ方もある。ポール・スウィージーの『歴史としての現代』（邦訳・岩波書店）という題名は，多くのことを考えさせる。

ところが，同時代の事柄を書き記していても，簡単なことで間違える場合が少なくない。筆者にとって身近な張作霖爆殺事件を中心に，実例を列挙しよう。関連資料の紹介を兼ねる内容である（『東京六華会』20周年記念誌，1993年に加筆・転載)。

①1928年から1935（昭和10）年まで，奉天（現在の瀋陽）総領事代理，ハルピン総領事代理を歴任し，外交官として，また戦後は衆議院議員として活躍した森島守人氏の『暗殺・陰謀・軍刀』（岩波新書，1950年）には，次のように書かれている。

「人も知る愛憎の念きわめて強い吉田（茂，奉天総領事，戦後に首相―カッコ内は引用者，以下同じ）の性格は日満間の雲行きの上にも反映し，吉田，張（作霖）の間柄はとかく円滑を缺き，張は吉田をもって眼の上の瘤となしていたが，吉田政策の遂行に支障を来たした原因としては他に満州における多頭政治を挙げねばならない。相並立する関東軍，関東庁，満鉄の日本側諸機関の外に，東三省官場内には日本陸軍（参謀本部）の派遣にかかる土肥原（賢二），嶬峨（正しくは儀我誠也）の現役軍人の顧問がおり，べつに張作霖限りの私設顧問として，松井七郎（正しくは七夫）豫備少将と豫備大佐の町野竹馬（正しくは武馬）がいた……。

かくして日本の対張態度はわが方の内部事情の故に，ややもすれば統一を缺き，吉田自身も不統一のために奉天を離るるの已むなきに至った」(16～17ページ)。

この回想は，張作霖爆殺事件の背景を知るためにも含蓄に富んでいるが，残念なことに，松井七夫氏と筆者の父儀我誠也及び町野武馬氏の３人について，明らかに姓名の誤記がある。

1928年６月４日「爆発列車に張作霖と同車していた顧問，嶬峨誠也少佐（華北事変発生後少将として冀東防共自治政府顧問となり，唐山に在勤中病死した）が負傷したままで飛びおり，又町野顧問が天津で下車したところから，関東軍全体の仕業だろうとの憶測もあったが，嶬峨が全然関知していなかったことは事実で，爆破関係者は関東軍中の二，三名に止まっていた。当時張の現役顧問は土肥原賢二大佐と嶬峨の二人であったが，土肥原が陰性的な性格のため，とかく敬遠され勝ちだったのに反し，嶬峨は明朗な人となりのため，東三省官場内の信頼を一身に集めていた。しかし中国側の信頼が厚かっただけに関東軍参謀間の評判が悪かったことは事実で，列車の爆破も国家の大事の前には，嶬峨一人位犠牲にしても已むを得ないとて，決行されたのであった。私は在満当時から嶬峨と昵懇にしていたが，昭和十二年華北事変発生後唐山で会見した折り，その後軍部の気受けはどうかと尋ねたところ，この頃ようやくお叱りも疑惑もとけたらしいと苦笑していた」(23ページ)。

儀我誠也は，張作霖の死後、張学良の軍事顧問，広島の歩兵第11聯隊付，旧制第二高等学校（仙台）の配属将校，山海関特務機関長を歴任，1935年８月には，高田の歩兵第30聯隊長となった。後，唐山特務機関長を経て天津特務機関長在任中の1938年（昭和13年）１月，天津で急死し，少将に進級した。森島氏の記述は，これらの点でも若干不正確である。

②児島襄『日中戦争』（ＶＯＬ１，1925～1931，文芸春秋，昭和59年）は，張作霖爆殺事件を詳述しているが，ここでも「顧問儀峨誠也少佐」（214ページ）と姓の誤記がある。

景山民夫『虎口からの脱出』（新潮社，昭和61年）は長編冒険小説であるが，「儀峨誠也少佐」（94ページなど）となっている。小説であるから「正誤」をあげつらうわけではない。

③参謀本部編『昭和三年支那事変出兵史』（巌南堂書店，昭和５年，昭和46年第２版）所収の「張作霖爆殺事件」は稲葉正夫氏収集の貴重な資料を含んでいるが，36ページの資料では「儀峨少佐」となっている。しかし，65ページの資料では「儀我少佐」と正しく記されている。

④根津司郎『昭和天皇は知らなかった』（早稲田出版，1991年）は，張作霖爆殺事件の首謀者河本大作大佐との単独会見による未発表の記録に基づいて書かれている。しかし，儀我誠也については，なぜか「嵯峨一弘」（92ページなど）と誤記されている。

⑤平一恕『大陸特務工作―大庭政利，丁政将軍の戦記』（白金書房，1975年）によれば，「満州の雄，張作霖とその列車に同乗していた日本陸軍将校儀我少佐以下数名が無惨にも爆死を遂げた」（298ページ）。姓名は正しいが儀我誠也は「爆死」はしなかった。

⑥胡桃沢耕史『闘神一伊達順之助伝』（文芸春秋社）は「日本人の小娘は北京駐在の儀峨特務機関長に易々と，列車の出発事件を書いた紙を手渡したのである」（249ページ）などとしているが，誤りが多い。

⑦松本清張『昭和史発掘』3（文春文庫版，1978年）所収の「満州某重大事件」は，当時の情勢を的確に描き出しており，正確に儀我少佐と書いている（67ページ）。

⑧高田義一郎『聖代暗殺事件』（萬里閣書房，昭和五年）は事件後２年余の早い時期に書かれ，姓名を含めて，ほぼ正確である。

⑨遼寧省檔案館・遼寧省社会科学院『『九・一八』事変前后的日本与中国東北』（遼寧人民出版社，1991年）の編者注（184ページ）なども正確である。

⑩ＮＨＫ取材班・臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』（角川書店，1991年）は，写真をも含めて正確である。

⑪古野直也『張家三代の興亡』（芙蓉書房，1999年）は嶬峨と誤記している（97ページ）。

⑫池宮彰一郎『義，我を美しく』（新潮文庫，1990年）所収の「満州某重大事件」では，正しく儀我誠也とされているが「予備役」少佐としているのは不正確である（109ページ）。

⑬半藤一利『昭和史探索』（ちくま文庫，2006年）は，張作霖爆殺に関する多くの日本側資料を圧縮・紹介していて，有益である。ただし所収の佐々木到一稿は，儀我誠也「大尉」と誤記している（192ページ）。

以上のように，ひとつの事件の中の１人の人物だけについても，正確を期することの難しさは予想以上である。後世の史家がこの小さな文章に気付いてくれるかどうか，心もとない。

〈筆者既発表の関連論文・随想〉

①「張学良氏と再会したい」『大阪保険医雑誌』1986年９月号。
②「中国懐古六十年」『衆星』第４号，1987年９月。

③「張学良と日中関係」『婦人通信』1991年３月号。
④「日中関係の歴史と高田の思い出」新潟県立高田高等学校校友会東京支部『支部会報』16号，1992年11月。
⑤「歴史の小さな正誤表」『東京六華会20周年記念誌』1993年12月。
⑥「中国と日本の100年」常葉学園浜松大学『経営情報学部論集』第８巻特別号，1996年３月。
⑦「魯迅３題」『交流簡報』1996年７月号。
⑧「1929年１月における張学良少帥」常葉学園浜松大学『経営情報学部論集』，第11巻第１号，1998年６月。
⑨「1920年代の日中関係試論」中央大学『経済学論集』第41巻第６号，2001年３月。
⑩「東アジアにおける戦争とテロリズム」『中央大学経済研究所年報』34号，2004年３月。
⑪「回想の蔣介石と高田・日本」新潟県立高田高等学校校友会東京支部『支部会報・雪椿』第31号，2007・平成19年11月。
⑫「張作霖・張学良と日本」『経済』2007年12月号。